

高等教育の動向と質的保証

学術会議「大学教育の分野別質保証検討委員会」

2008年10月29日 金子元久（東京大学）

1 高等教育の動向

趨勢

- 戦後 — 量的拡大の時代
 - エリート、大衆化、ユニバーサル化
- 21世紀初等 — 質的高度化への転換

背景

三つの要因

高等教育のユニバーサル化

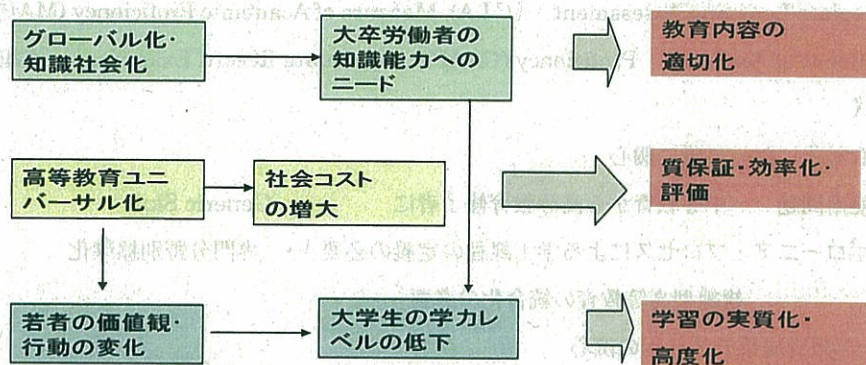
グローバル化

価値観の転換

背景

問題点

高等教育への要求



質的転換

三つの側面

教育内容の適切化

質保証・効率化

学習の実質化、高度化

質「保証」とは何か

最低水準の確保？

質の改善？

2. 1990年代以降の国際的な趨勢

アメリカ

アカウンタビリティへの要求

- Spellings Commission on the Future of Higher Education, A Test of Leadership: Charting the Future of Higher Education, s (U.S. Department of Education, 2006).

大学側の対応

- National Center for Higher Education Management, Measuring Up.

2001年から。各州の高等教育の状況を比較するデータベース。教育効果アセスメント掲載

- American Association of State Colleges and Universities (AASCU) and the National Association of State Universities and Land-Grant Colleges (NASULGC), ASULGC and AASCU. Toward a Voluntary System of Accountability Program (VSA) For Public Universities and Colleges (August 2006)。公立大学において以下のデータの収集を提案。①学生と両親の基礎情報、②学習行動に関するデータ (NSSE または CIRP を利用) ③ 在学中の付加価値 ()

試行結果—College Portrait: A Voluntary College Portrait: 大学ごとに 5-page の報告書 web reporting template

教育効果アセスメントのための調査・テスト (附表)

- National Survey of Student Engagement (NSSE)。2000年から。大学生の学習行動に関する調査を年ごとに実施。2008年には774大学が参加。
- Collegiate Learning Assessment (CLA), Measure of Academic Proficiency (MAP)、Collegiate Assessment of Academic Proficiency (CAAP)、Graduate Record Examination (GRE)など

ヨーロッパ

2000年代になって質に関心

雇用問題 中等教育から高等教育修了者に → Generic Skill

ボローニア・プロセスによる学士課程の定義の必要 → 専門分野別標準化

複線型高等教育の統合化の必要

大学教育成果テストへの関心

OECD

AHELO (Assessment of Higher Education Learning Outcomes)

四つの領域での効果測定の試行を検討

専門領域

基礎能力

大学教育による付加価値

周辺情報

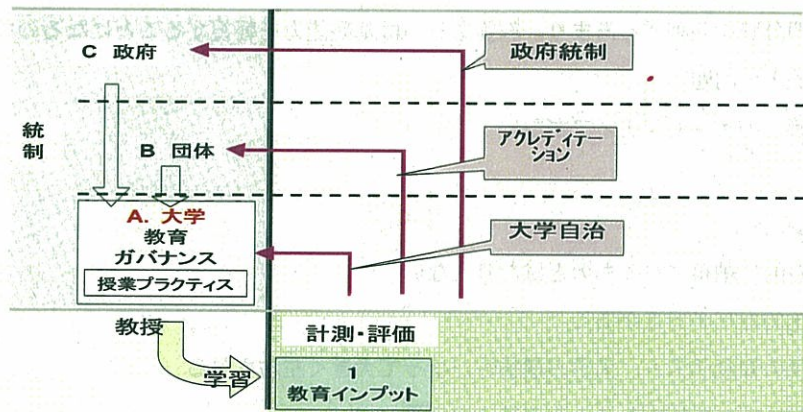
3. 大学教育効果評の構図

測定と統制

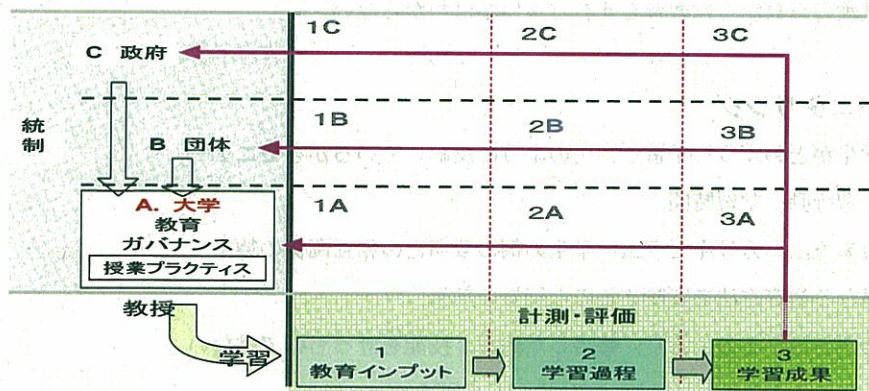
測定評価 — インプット、プロセス、アウトカム

統制 — 大学、中間団体、政府・市場

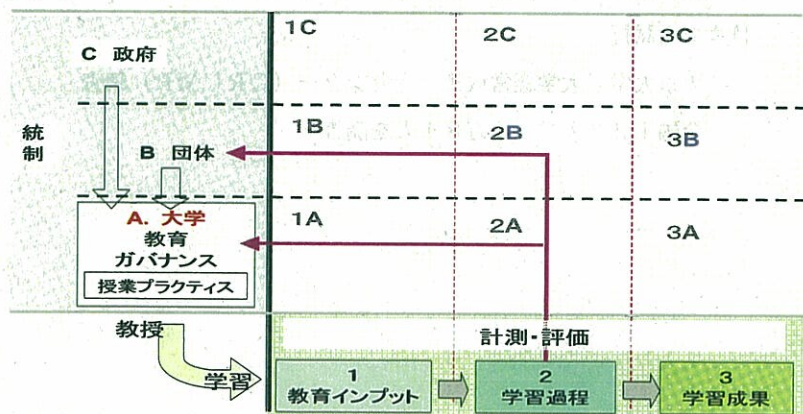
古典モデル



結果による統制



過程モニタリング



どれをキーとしてとらえるかが問題

4. 効果測定方法の問題点

専門領域別テスト

- 各領域で専門家が一致することができるか
- どのような領域の定義をするべきか
- ペーパーテストでは把握できない能力をどう測るか
 - マニユアル的な思考を強制するのではないか
- 専門分野を強調するあまり、教養あるいは基礎能力を軽視することになるのではないか
- 実施上の問題
- 回答へのインセンティブがない

一般能力テスト

- 一般的に納得されるものとはなりえない
- 文化的なバイアスがある
- 一種の知能テスト。大学の選抜性によって大きく左右される
- 学生全部に実施することは実際には困難
- 結果をどのように質的改善に使うか
- 試験の点数からは教育をすれば良いかはわからない

学習過程モニタリング

- 学生がどのように学習し、どのように反応しているかをモニター
- 学習行動 学習時間
- 授業方法・カリキュラム、学生の側の要因との相互関係の特定
- 異なる教育方法を実験するのと同様の効果
- 学習をはかるのであり、修得した知識、技能を計るものではない
 - アメリカにおいていくつかの試み
 - National Survey on Student Engagement (NSSE)
 - 日本でも試行
 - 東京大学 大学経営政策研究センター（CRUMP）調査
 - 全国120大学、4万8千人を調査

結論. 大学教育改善の展望

主要な戦略

イギリス — 専門分野別の教育改善

学位水準基準

Subject Benchmark Standards

Higher Education Academy

Subject Centers

アメリカ — 様々な改革主体

大学団体

アクレディテーション団体

大学教員の運動

Scholarship of Teaching and Learning

大学内の組織

Office of Institutional Studies

Faculty Development

基本的な選択

一定の標準を決め、それによって統制する

現実にはきわめて困難

基本的に多元的

多元的な基準、改善のための努力が必要

日本の課題

現状

大学内の自己改善機能が未熟

適格認定制度(Accreditation)はまだ有効に機能していない

基準がない

課題

大学の自己改善機能の形成

中間団体の役割

基準の形成、合意

大学を通じたモニタリング、有効な知見の共有、フィードバック

政府の役割

直接の政策手段には限界

上記を誘導する必要

附表 アメリカにおける各種テストの比較

Table 1. Overview of Assessments

Assessment	Workforce Readiness/General Educational Skills	Domain-Specific Knowledge	Soft Skills	Student Engagement
Area Concentration Achievement Tests (ACAT®)		☑		
College Basic Academic Subjects Examination (College BASE)	☑			
Collegiate Assessment of Academic Proficiency™ (CAAP)	☑			
Collegiate Learning Assessment (CLA)	☑			
Community College Survey of Student Engagement (CCSSE)				☑
iSkills™ (formerly ICT Literacy)	☑			
Measure of Academic Proficiency and Progress™ (MAPP™)	☑			
Major Field Tests (MFTs)		☑		
National Survey of Student Engagement (NSSE)				☑
Standardized Assessment of Information Literacy Skills (SAILS)	☑			
WorkKeys®	☑			
WorkKeys® (Teamwork)			☑	

ETS, A Culture of Evidence: Critical Features of Assessment for Postsecondary Learning, 2007. p.9,